

お嫁さんガチャで爆乳姫を引いた件

序：確定演出

画面が虹色に煌めいたのは、日付が変わって三十分も過ぎた頃だった。

無料分の石で適当に回した十連——所謂「お嫁さんガチャ」の最終排出。「★5確定演出」にしては派手すぎるエフェクトがスマホの液晶を覆い尽くし、部屋の空気そのものが震えたような錯覚。そして、光が溢れた。

スマホから——ではなく、部屋の真ん中、ベッドとデスクのあいだの空間から。

「……はあ……？」

光が収まったあと、そこに立っていたのは。

和装とも洋装ともつかない、胸元の大きく開いた衣装。腰まで届く艶やかな黒髪のポニーテール。そして何より——服からはみ出した**幅広でぷっくりとした乳輪**と、布地を押し上げる**逞しい乳首**。そのさらに上、衣装の帯の上に乗るようにして存在する**巨大すぎる双丘**。

「……………ここは？」

自分で状況を掴めていない様子で、彼女はきよろきよると辺りを見回した。仕草はあどけないのに、ちょっと動くたびにその爆乳がブルン、ブルンと大きく揺れる。乳輪が服の縁からますます顔を覗かせ、乳首が布地の上からくっきりと主張を始めた。

スマホの画面には表示されている。

> **【嫁・楠舞神夜】 おめでとうございます！あなたの元へお嫁入りしました！**

そう——これはつまり、そういうことなのだ。

壱：戸惑う神夜姫

「これは……私は、楠舞神夜と申します。神楽天原の楠舞家の……」

彼女は丁寧に自己紹介を始めたが、すぐに言葉を詰まらせた。

見慣れない狭い部屋。壁には見たこともない絵や札。窓の外には奇妙な形の灯りが並んでいる。

「……どうやら、ここは私の知るどこでもないようです。謎極まりないです……」

それから彼女は、ぽかんとした表情で、自分をじっと見つめてくる人物に気づいた。

その視線はまず彼女の顔を捉え、それから胸元へ——乳輪がはみ出た128cmの爆乳へ——そして露わになった太腿へ、下腹へと這うように動く。舐めるように、食い入るように。

「あ……あの、そんなにジロジロ見られるのは……」

神夜はわずかに頬を染めた。だが同時に、自分の身体の奥がじんわりと熱くなるのを感じていた。

——見られてる……この方、わたしのことを、すごく熱い目で……

「……は、はい。私は楠舞神夜。あなた様のお、お嫁さん……なのですか？」

スマホの画面を見せられて、神夜は目をしばたかせた。わけはわからないが、どうやら自分はこの見知らぬ部屋の主のもとに「お嫁入り」したらしい。

「不可思議なこと極まりないですが……」

しかし彼女は、品よく居住まいを正すと、相手の目を見つめて微笑んだ。

「楠舞家の姫として、名乗りもせず去るのは無作法です。ご主人様……とお呼びすればよろしいでしょうか？ まだ勝手がわからない身ですが、よろしければ……その、どうぞお気軽に……」

言葉の終わりは少しだけ震えていた。目の前の人物の身体に、明らかな変化が起きていたからだ。下衣のあたりが、見るからに窮屈そうに盛り上がっている。

——あ……あれって……お、おチンポ様……！

神夜の胸がドキリと跳ねた。ずっと一人旅のあいだ、路銀を稼ぐための売春のなかで、何度も何度も見てきた「おチンポ様」の気配。しかし今回は、金銭のやりとりではない。「お嫁さん」として、夫に求められている——その事実が、彼女の子宮の奥をきゅううっと疼かせた。

「……どうぞ。楠舞神夜、あなた様のお嫁さんです。遠慮なさらず、お触りくださいませ……♥」

式：触れる手、濡れる秘所

恠々と伸ばされた指先が、まず神夜の頬に触れた。それから首筋、鎖骨——そして、ためらいながらも、ついに

128cmの爆乳へと沈んでいく。

「……んっ♥」

衣装の上からでもわかる、男の指の熱。肉厚な乳房がグニィ……と形を変え、服の隙間から乳輪がさらにせり出した。

「は、恥ずかしい……ですけど……もっと、ちゃんと触ってくださいませ♥ その……おチンポ様も、きっとお辛いでしょうから……」

神夜は男の手を取ると、自分の衣装の合わせ目へと導いた。帯を緩め、胸元をくつろげる。途端に、128cmの爆乳がポロンツとあらわになった。

「……ああっ♥」

完全に露わになった双丘。その頂点に鎮座する、握り拳ほどの大きな乳輪。淡い桜貝色のその中心で、親指の先ほどに肥大した乳首が、コリコリと硬く勃起している。

「ああ……すごく、膨らんでしまって……お恥ずかしい……♥」

男の指が乳輪をなぞるたび、神夜の口からは熱い吐息が漏れた。指が乳首を摘まみ、コリコリと転がされるたび、彼女の膝がかくんと震える。

「ひあんっ♥ 乳首、そんなにいじめられると……あっ、あっ、だめ、それ、コリコリって……♥」

彼女のくちびるからうっすらと舌が覗き、唾液がテラテラと光る。指で捏ね回されるたび、乳首はもっと硬く、もっと大きく膨らんでいく。もう片方の乳首も、触れられていないのにツンと尖り、先端からはうっすらと蜜のようなものが滲み始めていた。

「お、おチンポ様も……♥」

神夜は潤んだ瞳で、男の下衣の膨らみを見つめた。

「わたし、おチンポ様を崇めてよろしいですか……？ お嫁さんですから、妻として、きちんにご奉仕させていただきますい……♥」

参：奉仕と崇拜

神夜は男をベッドに導き、その前にひざまずいた。

下衣を下ろすと一現れた陰茎に、彼女は思わず息を呑んだ。

「はぁ……♥」

硬く勃起したソレは、天を衝くように反り上がり、亀頭は真っ赤に充血して先走りの雫を滲ませている。血管の浮き出た竿はズッシリと重く、陰囊はたっぷりと熱い種を湛えて重たげに垂れ下がっていた。

「なんて……なんて立派なおチンポ様……♥ ありがとうございます……私のような者を嫁にしてくださった上に、こんなに嬉しいおチンポ様を拝ませていただけるなんて……感激極まりないです……♥」

彼女は恭しく両手で陰茎を包み込んだ。熱い。ドクドクと脈打っている。それを感じただけで、神夜の瞳に涙が滲んだ。

「んっ……♥ ちゅっ……」

まずは亀頭の先端に、愛おしそうに口づけを落とす。とろりと溢れた先走りを、唇でそっと掬い取る。

「おチンポ様の御神酒……ありがたく頂戴いたします……♥ んちゅ……れろお……♥」

彼女は亀頭全体を口に含むと、舌で丁寧に扱き始めた。冠状溝をぬめるように舐め上げ、尿道口をチロチロと刺激し、カリの裏まで舌を這わせる。その仕草は崇拜そのものだった。男の陰茎を、聖なるもののように、恭しく、しかし貪欲に奉仕する。

「んちゅっ♥ んふ……♥ おチンポ様、すごく熱い……ドクドクしてます……♥ ちゅぽっ、ちゅばあ……♥ れろ……じゅるるっ……♥」

徐々に彼女の口淫は激しさを増していく。唾液を滴らせながら、竿全体を根元まで啜え込もうと喉を開く。口の端から溢れた唾液が顎を伝い、128cmの爆乳の谷間へと流れ落ちていった。

「んぐっ……♥ おチンポ様、気持ちいいですか……？ わたし、もっと上手にご奉仕したいです……♥ じゅぽっ、じゅぽぽっ……♥」

肆：パイパンの秘所

しばらく口で奉仕を続けたあと、神夜は名残惜しそうに口を離れた。陰茎は彼女の唾液でテラテラと濡れ光り、さっきよりさらに一回り大きく膨張している。

「おチンポ様、すごく硬くなられて……♥ あの、そろそろ……私の、こちらも……」

彼女は立ち上がると、衣装の腰布を外し、帯を解いた。するすると布地が落ち、ついに完全な裸身が露わになる。

むっちりとした太腿のつけ根——そこは、**完全なパイパン**だった。産まれつきムダ毛の一切生えない白く無毛の恥丘が、ぷっくりとふくよかに盛り上がっている。大陰唇は純白のまま閉じているが、そのあいだからには既に透明な愛液がとろとろと溢れ、内腿を伝って輝いていた。

「あ……こんなに濡れてしまって……お恥ずかしい……♥でも、これも全部、あなた様とおチンポ様のおかげです……♥」

神夜はベッドに横たわり、自ら両足を開いた。パイパンの割れ目がくばあ……と開き、内側のヒダ深い肉ビラが露わになる。クリトリスはぷっくりと充血して包皮から顔を覗かせ、膣口はヒクヒクと物欲しげに収縮していた。

「どうぞ……♥私のおまんこ、あなた様だけのものです。おチンポ様を……子宮の奥まで注いでくださいませ……♥」

伍：孕ませの交わり

男が覆い被さり、熱く滾った亀頭がパイパンの割れ目に押し当てられる。

「あっ♥」

神夜の全身がビクンと跳ねた。膣口に触れただけなのに、愛液がぶちゅっと溢れ、亀頭を濡らす。

「お、おチンポ様が……入ってきます……♥ ああっ、これ、すごく……すごく熱い……♥」

グブウ……と音を立てて、亀頭が膣口をこじ開ける。パイパンの大陰唇が左右に押し広げられ、肉ビラが陰茎に絡みつく。

「んあああああっ♥♥♥」

一気に奥まで挿入された瞬間、神夜は背中を仰け反らせて絶叫した。128cmの爆乳がブルンツと激しく跳ね、乳首から母乳がピュッと飛び散る。

「すごい、すごいです……♥ おチンポ様が、わたしの子宮まで届いてる……♥ ありがとうございますっ、感激極まりないです……♥」

膣は熱く収縮し、侵入者を締め上げる。無数のヒダが陰茎に絡みつき、まるで吸い込むように蠕動する。奥の子宮口がキスするように亀頭を吸い上げ、射精を促した。

「動いて……ください♥ わたし、あなた様のお嫁さんですから……好きなだけ、好きなようにお使いくださいませ……♥ 孕ませても……いいんですから……♥」

抽送が始まると、神夜の声は途切れることなく嬌声を紡ぎ続けた。

「んあっ♥ あっ♥ あ`っ♥ 奥まで来てるっ♥ 子宮ゴリゴリされてるうっ♥ おチンポ様、すごいつ、すごすぎますう……♥」

パイパンの結合部からは、激しい抽送のたびに愛液が泡立って溢れ出し、白いクリーム状になって陰茎の根元と大陰唇を汚していく。爆乳は打ちつけられるたびに大きく波打ち、乳首からはぴゅっぴゅっと母乳が迸って男の胸板を濡らした。

「孕むっ♥ これ絶対孕んじゃうっ♥ 子宮がおチンポ様に突かれてっ、種付けの準備できちゃってますう……♥ あなた様の赤ちゃんっ、孕みたいっ♥ お嫁さんとしてっ、当然のことですからあ……♥」

陸：中出しと絶頂

「――あ`っ♥♥♥ おチンポ様がっ、いまっ、ドクドクってっ♥♥♥」

子宮口に亀頭が押し付けられ、熱い精液が一気に注ぎ込まれるのを感じて、神夜は全身を震わせた。

「あ` あ` あ` あ` っ♥♥♥ 御神酒、御神酒が子宮にい……♥♥♥ 熱いつ、熱すぎますうう……っ♥♥♥」

彼女の膣がギュウウウッと激しく収縮し、陰茎から精液を一滴残らず搾り取るように痙攣する。その刺激で彼女自身も絶頂に達し、パイパンの結合部からは潮がブシャッと吹き出した。

「んあああああっ♥♥♥ イグッ♥♥♥ イグイグイグイグううっ♥♥♥ 極まりっ、極まりないですううっ♥♥♥」

彼女の下半身が何度も跳ね、膣が精液を子宮の奥へ奥へと吸い上げる。128cmの爆乳が大きく揺れ、乳首から吹き出した母乳が、神夜自身の顔や髪まで飛び散って艶めかしく光る。

長い長い絶頂ののち、ぐったりとした神夜は、しかし満ち足りた笑みを浮かべて相手を見上げた。

「はあ……はあ……♥ おチンポ様の御神酒、子宮いっぱいいただきました……♥ これで……きっと、孕みました……♥ あなた様の子供、わたしのお腹で育てさせてくださいね……♥ お嫁さんになった意味が、いま、ちゃんとわかりました。感謝感激、極まりないです……♥」

終：それから

それから一週間後。

神夜はすっかり現実世界の生活に馴染んでいた。テレビのリモコンも、電子レンジも、最初は首を傾げていたが、今では「不思議なものですね」と言いながら使いこなしている。

そして何より――彼女のお腹には、いくらかふっくらとした膨らみが生まれ始めていた。特異体質のなせるわざか、あの一夜の交わりからわずか数日で、神夜はすでに妊娠五ヶ月相当の体になっている。それでいてプロポーションはまったく崩れておらず、爆乳はむしろ母乳を湛えてさらに一回り大きくなり、乳首は常にツンと勃起し、衣装の胸元から乳輪がますますはみ出ている。

「あなた様……♥ 今日もおチンポ様、元気にされてますね……♥ よろしければ、妊婦のおまんこでもよろしければ、たっぷり可愛がってくださいませ……♥ というより、むしろ……」

彼女は悪戯っぽく微笑んで、相手の手を取って自分の腹に導く。

「もう、次の子種が欲しいです……♥ たくさんたくさん孕んで、あなた様との子を産み続ける……それがお嫁さんとしての幸せ極まりないですから……♥」

そう言うと神夜は、今日も恭しく相手の前にひざまずき、両手でそっと「おチンポ様」を包み込むのだった。

「んっ……♥ ちゅっ……♥ 今日も一日、あなた様のおチンポ様に、たっぷりご奉仕させていただきますね……♥ れろお……♥ ちゅば……♥」

パイパンの割れ目からは、すでに愛液がとろりと垂れ始めている。

今夜もまた、一晩中、彼女の嬌声と「極まりないです」が絶えることはないのだろう。

(了)